

八代市にある北片宮・薬師堂に関する研究

早野 彰人¹ 森山 学^{2,*}

A study on Kitakata-gu shrine and Yakushi-do in Yatsushiro City

Akito Hayano¹, Manabu Moriyama^{2,*}

A purpose of this paper is to clarify the architectural characteristics of Kitakata-gu shrine and Yakushi-do in Yatsushiro City, Kumamoto.

They come from Jogan-ji Temple that the Sagara family founded in 1513. Originally Kitakata-gu shrine is Katanogawa Myouken-sha shrine attached to the temple. Yakushi-do was founded again instead of the temple by the villager in 1694. The current building of the Yakushi-do was built in 1820. Two buildings continue standing on the same site to the present time after the time of Separation of Shinto and Buddhism.

キーワード：北片宮・薬師堂、八代市、神仏分離、相良氏

Keywords：Kitakata-gu shrine and Yakushi-do, Yatsushiro City, Separation of Shinto and Buddhism, the Sagara family

1. はじめに

1.1 目的

筆者はこれまで、八代市内における同一境内に神社とお堂が並び建つ事例を調査研究してきた。①奈良木神社・十一面観音堂⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾と、②新傘田加藤神社・島阿弥陀堂・島観音堂⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾である。本稿は、同じく社堂が建ち並ぶ八代市内の事例である、北片宮および薬師堂について調査研究を行い、建築的視点から来歴、建築的特徴を明らかにすることを目的とする。

1.2 研究方法

現地にて実測し、平面図と配置図を作成した。敷地測量にはトータルステーションを用いた。実測結果から柱間寸法の検討を行った。また文献調査、棟札の読解、ヒアリング調査の結果もあわせて分析を行った。

現地調査の日時は、表1のとおりである。

表1 現地調査日

調査内容	調査日
実測調査	平成28年9月23日, 27日, 10月11日
ヒアリング調査	平成28年12月28日, 平成29年1月18日, 3月15日

¹ 株式会社藤永組
〒861-0831 熊本県八代市萩原町11-6
Fujinaga-gumi Co., Ltd.,
11-6 Hagiwara-machi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan 861-0831

² 建築社会デザイン工学科
〒866-8501 熊本県八代市平山新町2627
Dept. of Architecture and Civil Engineering,
2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan
866-8501

* Corresponding author:
E-mail address: m-moriya@kumamoto-nct.ac.jp (M. Moriyama).

2. 周辺環境

北片宮・薬師堂は、八代市東片町2241にある。境内の東はすぐ山裾で、境内の南隣の駐車場には東片自然公園へと登る777段の階段がある。北隣は空地で寄せ墓がある。

境内への入口は西側である。その境内西側に用水路と前面道路がある。前面道路から用水路を橋で渡るのが参道である。この用水路が麓川用水路（新川）で、前面道路が旧薩摩街道である（図1）。

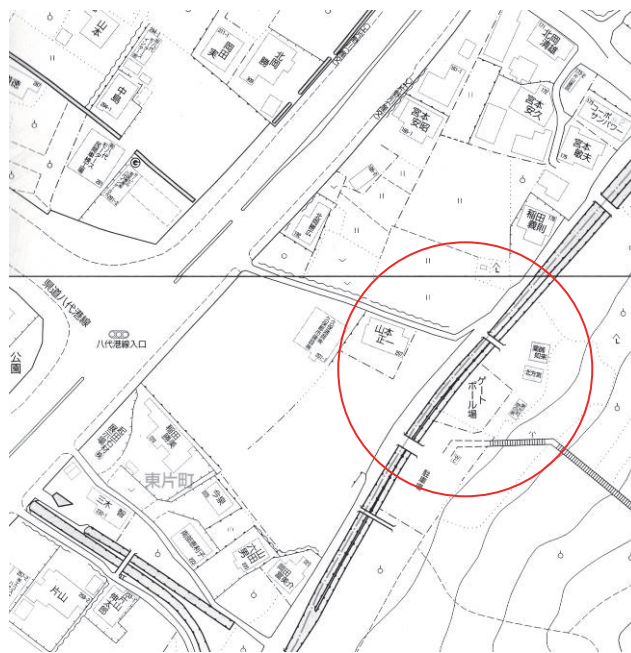


図1 敷地の周辺図

(出典：ゼンリン住宅地図 熊本県八代市1, (2010))

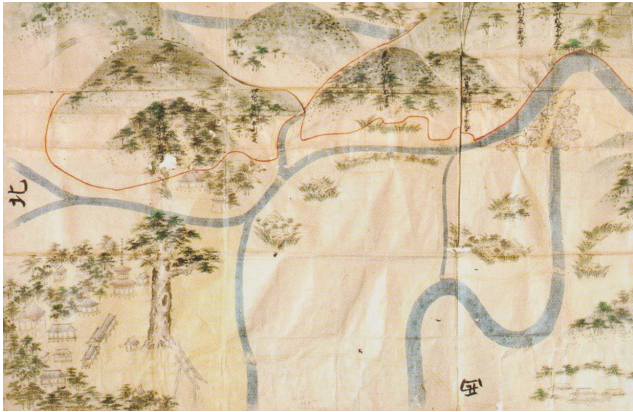


図2 妙見宮知行宛行社山絵図
(元禄6年(1693), 八代神社所蔵)



図3 八代郡新地御覽の絵図(文政7年(1824), 個人所蔵)

2.1 麓川用水路(新川)

麓川用水路(新川)は、文政5年(1822)の七百町新地干拓の際に球磨川から引かれたものである⁹⁾。球磨川右岸へは、南北朝時代に建設されたとされる「太田井手」と呼ばれる用水路が既に存在しており⁹⁾、麓川用水路はその東の山裾に新たに開かれたものである。

これについて文献10では、境内よりさらに北方の山裾、龍峯地区の岡小路まで引かれていた用水路を、文政5年(1822)に、平野部である有佐まで新たに延伸したとしており、「新川」という別称は、そのためであろうと解釈している。確かに球磨川扇状地にあたるこの地域一帯は、平安時代以来の良好な水田地帯であり、荘園とされてきた地である。文政期以前に、灌漑用水路が存在していてもおかしくない。

元禄6年(1693)に描かれた「妙見宮知行宛行社山絵図」(図2)には、妙見宮(現・八代神社)の境内脇から、北片宮・薬師堂方面へ、山裾を北上する水路が描かれている。ただしこれは水無川から引かれている。

つまり麓川用水路は、文政期に球磨川から導水し、この水無川からの従来の用水路に合流させ、新田への水量を確保したものと考察することができる。

文政7年(1810)の細川斉樹による八代郡新地御覽の道

順地図(図3)には、球磨川から引かれた用水路が妙見宮境内(「妙見祠」と記述)を迂回して山裾に寄り付き北上し、「岡小路村」隣の「岡中村」から平野部へと進路を変更している。その進路変更付近に「新川筋」と記述されている。

昭和37年(1962)、麓川用水路は不知火幹線として、コンクリート護岸に改修され現在に至る。ヒアリングによれば、それ以前は土手だったようである。

現在の境内参道である橋梁はコンクリート製であるが、用水路改修以前は、石造の眼鏡橋だったようである。近辺にはその他にも2本の眼鏡橋がかかっていたようである。

2.2 濠

ヒアリングによれば、境内の北端ならびに南半分は、かつては用水路に直結する濠だったようである。用水路とは、前項にあるように文政5年(1822)以前は水無川からの水路、以降は麓川用水路(新川)に相当する。現在は埋め立てられ、南半分はゲートボール場になっている。

図4は後述する成願寺(永正10年(1513)創建)の復元平面図である。この図中では、境内周囲を取り囲む濠が描かれており、境内は島状である。

境内の南の濠には湧水が湧き出していたようである。成瀬久敬(享保13年(1728))、森本一瑞(明和9年(1772))、水島貫之・佐々豊水(明治17年(1884))の書を増補改訂し、大正5年(1916)に発行された文献11ではこれを「清泉」と呼び、『八代古跡略記』では「成願寺の清水」という俗称を伝えている⁹⁾。現在は山裾南側に新たに2か所の湧水があり、平常時は湧き出ないが梅雨には湧くようである。

ヒアリングによって明らかになった濠と湧水の位置は、図6の実測配置図に印す。

2.3 薩摩街道

敷地前面道路は、国道3号線の一本裏を通っている。

これは平安時代には筑後から薩摩を結んだ小路であった。この小路には駅家が置かれたが、境内付近では「高屋」と「片野」に駅家が置かれたようである¹²⁾。「片野(片野川)」は「上片町字高取・中森」と推定されている¹³⁾。つまり境内は、「高屋」から「片野」へ至る途中にあつて、この「片野」付近に該当する。

また江戸時代には薩摩街道に編成される。熊本・新町から九里であることを示す九里木が「岡中村」に、十里木が「上片野川」に置かれた¹⁴⁾¹⁵⁾。この間に境内はあつて、「上片野川」付近に該当する。

図3では、この薩摩街道を「往還筋」と記述し、「岡中村」、「上片ノ川」各々の近くに「九里木」、「十里木」と記述している。また境内のある地域には「北片ノ川」とある。

前面道路沿いには、現在も複数の祠を確認することができ、街道として活用されてきたことがわかる。そのうち境内付近の祠には、天保14年(1843)作の弁財天像が祀られており、「北片野川村氏神」という墨書がある。

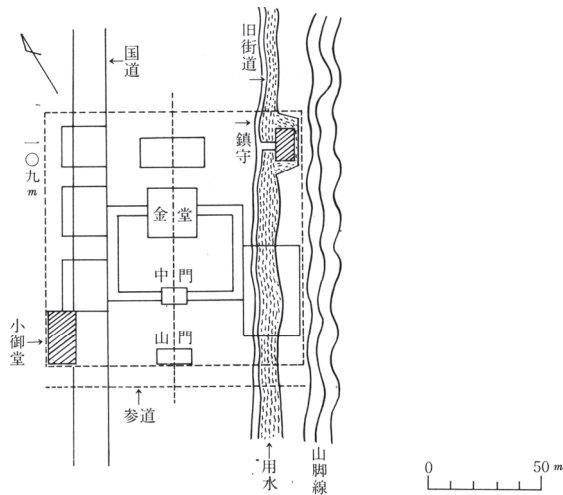


図4 成願寺復元平面図（蓑田田鶴男，出典：文献9）

3. 来歴

3.1 成願寺

名和氏が八代の領主であった中世にあって、相良氏は正平元年（1346）、寛正4年（1463）、文明16年（1484）、文亀元年（1501）と、短期間に八代の一部を手にした時期があった。そして文亀3年（1503）には、相良長毎が本格的に八代を支配するに至る（～天正13（1585））⁹⁾。

長毎は永正9年（1512）に隠居するものの、その翌年の永正10年（1513）、現在の北片宮・薬師堂境内を含む地域に、日證山成願寺を創建する。薬師如来を本尊とする真言宗寺院で、相良氏祈禱所、後年は菩提所だったようである⁹⁾ ¹¹⁾¹⁶⁾。

当地には文献9によれば、「成願寺村」、「門前村」、「田平村」、「岡神村」という地名が残り、ヒアリングによれば「上門前」、「下門前」、「木戸」、「ナグリ」、「茶園」という地名が残っていることから、当地に成願寺が建立されたことが証明される。

この立地の理由としては、重要な交通路であり八代へと通じる街道と、良好な水田へ水を供給する用水路を守ることが挙げられるだろう。さらに古麓城の北東にあたることから、その鬼門封じを目的にしたと考えられている⁹⁾。

相良義陽代の住職は響野原の戦い（天正9年（1581））で義陽とともに戦死している⁹⁾ ¹¹⁾¹⁶⁾ことから分かるように、住職には相良家家臣を充てており、非常時には砦として意識されていた。

図4が、文献9に掲載されている、成願寺の復元平面図である。ただしこの復元図に従えば、伽藍内を用水路と街道が横切ることになる。そのため配置自体については、検討の余地があると言えよう。

同書では、その規模を一町四方もしくは二町四方の大きであったと推定している。薬師堂に残る棟札（文政3年（1820））でも、この伽藍の様子を、ただただ広い寺領と大

きく堂々たる諸堂であったという意味で、「封疆漠漠寺院巍巍」と記している（図5）。

北片宮・薬師堂は、この成願寺に由緒がある。また現在、国道3号線の西側沿いに小さい祠があって、小御堂（こみ）堂、金堂、方見堂と呼称されている⁹⁾ ¹¹⁾が、これも成願寺に由来するものと伝えられている。図4の復元の配置や規模の根拠の一つは、北片宮を成願寺の鎮守として伽藍の北東、鬼門に配し、小御堂を南西、裏鬼門に配した、という推測に基づいている。

諸堂は、その後、小西時代（天正16年（1588）～慶長5年（1600））に破却されたとされている。

3.2 成願寺鎮守としての北片宮

北片宮は本来、妙見社であり、古くは『国郡一統誌』（寛文9年（1669））に「妙見」と記述されている¹⁷⁾。『妙見宮実紀』（享保15年（1730））には「片野川妙見社」と記され、末社の一つに挙げられている¹⁷⁾。また文献11では「妙見社」、文献18では「妙見堂」と記されている。

文献19によれば、相良氏にとって妙見神は「勝軍神」と

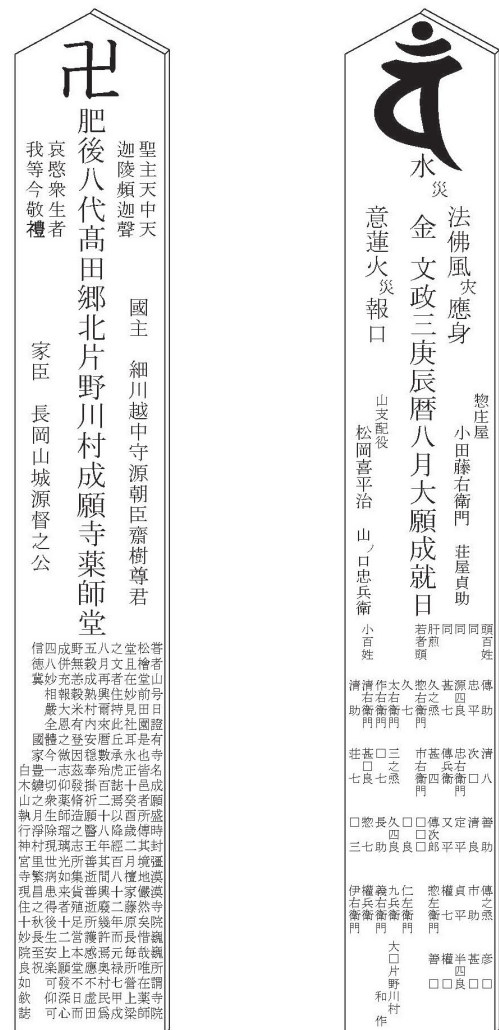


図5 薬師堂棟札（文政3年（1820）8月）の実測図

位置づけられるものであり、文献 20 では妙見各社は「八代庄園支配機構の手段」であり、また妙見神は水神としての性格も兼ね備えている。

それらを総合的に勘案すれば、成願寺の鎮守として妙見社が勧請された理由を推察できる。

天正年間に萩原天満宮・感応院が破却された際、その社僧・梅本院は、やはり破却された成願寺廃跡に残るこの妙見社に移っている⁽¹⁴⁾。このことから天正年間にも社殿は残存していたと考えられる。

妙見宮の末社の一つ、植柳妙見社の棟札によれば、寛永 8 年 (1631) に城主・加藤正方が命じ当社を再興したとある。この時、片野川妙見社の社殿を移築し、梅本院の子・胎蔵院が植柳妙見社に在住したようである。ちなみに片野川妙見社には、梅本院の子・真如院が在住したようである⁽⁹⁾⁽¹⁴⁾。

前述のように『国郡一統誌』(寛文 9 年 (1669)) に記述があることから、片野川妙見社には、その後寛文 9 年 (1669) までに、新たに社殿が新築されたと言えよう。

3.3 成願寺再興としての薬師堂

文献 9 では、「江戸の中ごろ村人が成願寺を復興するつもりで、鎮守社の地に薬師堂を建て、村の鎮護を祈ったのであろう」と推察している。文政 3 年 (1820) の棟札 (図 5) には、再興年を元禄 7 年 (1694) 8 月と記してある。また文政 3 年 (1820) の改築については、村民が五穀成熟や村内安泰を薬師如来に祈願する（「村民爲五穀成熟村内安穩奉掛祈願醫王善逝」）とあり、推し量れば先立つ再興時も村民によるものであったと考えられる。

再興の際、水無川から引かれた用水路と濠に囲まれた狭小の境内に建設したのであろう。植柳妙見社に移築後に新築された片野川妙見社社殿が既にあり、薬師堂はそれに隣接して建てられたであろうことから、この配置はほぼ必然的であった。

薬師如来が東方の瑠璃光浄土の教主であることから、境内入って奥の東側山裾で西を向く配置は、上記の敷地条件の必然性に加え、宗教的にも適した配置であったと言える。

ちなみにこの棟札を記したのは「白木山執行神宮寺現住十妙院良如」である。白木山神宮寺は妙見宮の神宮寺であって十妙院は当時 (文政 8 年 (1825)) に遷化⁽¹⁸⁾の住職である。神仏習合時代の妙見宮との関連が窺える。

また堂内に残る年代記載で、棟札の次に古いものとしては安政 7 年 (1860) の奉納絵がある。

4. 建築的特徴

4.1 境内の現況

図 6 が実測配置図である。

境内東、山裾側に、正面から向かって右に北片宮、左に薬師堂が並び建つ。

その北片宮と薬師堂の間をほぼ向いて、旧薩摩街道から境内へ橋がかかる (図 7)。昭和 37 年 (1962) の用水路の改修以前は石造の眼鏡橋であった。ヒアリングによればその橋は国道 3 号線へつながる小路に対して直線上にあったとされ、また石灯籠の位置は変わっていないことから、現況より西に向いていたと考えられる。

石灯籠は橋の袂に一对あって、皇紀 2600 年 (1940)、日支事變出征記念に奉寄進されている。

石灯籠の南、約 1.5 m の位置に、昭和 22 年 (1947) に個人により立てられた祠がある。濠が埋められる前、濠に沿って玉垣があったようだが、その玉垣の石柱が祠横に置かれている。

北片宮の前的一对の狛犬は、昭和 16 年 (1940) に奉納されている。

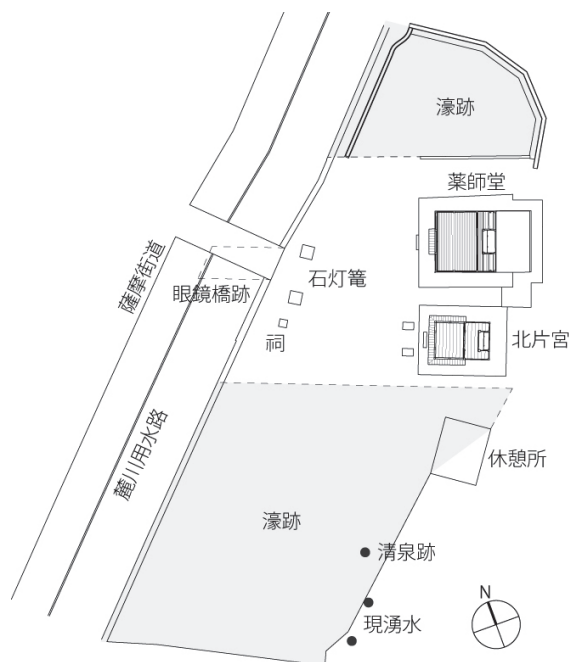


図 6 北片宮・薬師堂境内の実測配置図



図 7 橋からみた境内 (平成 23 年 12 月 26 日撮影)

4.2 北片宮

4.2.1 概況

北片宮（図 8、9）は北西 70°の向きに建ち、本殿、拝殿が一体となって構成されている。桁行 3 間、梁間 3 間で、桁行のうち拝殿は 2 間、本殿は 1 間である。

屋根は入母屋造妻入り、棧瓦葺きである。大棟鬼瓦、隅鬼、巴瓦には八代神社（旧妙見宮）の社紋「丸に二引き両紋」がある（図 10）。現在の瓦は、棟札（図 11）より平成 23 年（2011）の葺き替えであるが、それ以前の瓦が床下に保管されていて、そちらにも「丸に二引き両紋」がある。この葺き替えの時、妻飾りが墓股から狐格子に変更されたのが写真から把握できる（図 12）。

ヒアリングから、昭和初めまたは大正時代に、茅葺きを瓦葺きに葺き替えたようである。薬師堂には「薬師堂小屋上建築」と書かれた昭和 3 年（1928）の棟札（図 19）があり、この時、同時に工事されたと考えられる。

柱は礎石に立てられたようであるが、現状はその礎石を



図 8 北片宮（平成 28 年 9 月 23 日撮影）

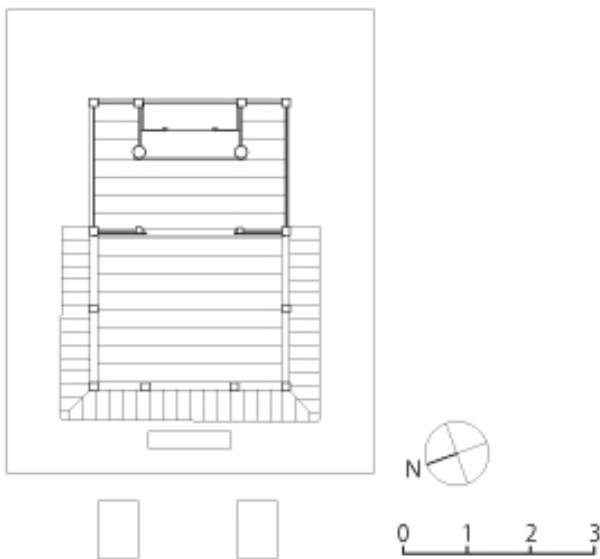


図 9 北片宮の実測平面図



図 10 北片宮の隅鬼
（平成 28 年 9 月 23 日撮影）

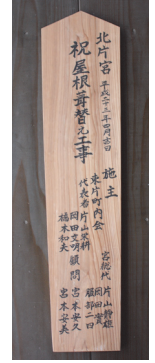


図 11 北片宮棟札
（平成 23 年 4 月）



図 12 平成 23 年の葺き替え工事以前の写真
（左：薬師堂，右：北片宮）

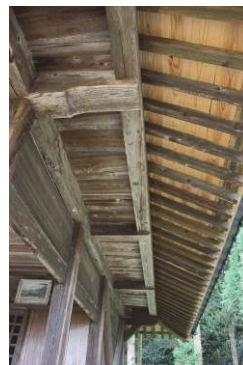


図 13 北片宮の軒天井 図 14 北片宮の本殿拝殿境
（平成 23 年 12 月 26 日撮影） （平成 28 年 9 月 23 日撮影）



図 15 北片宮内陣の組物周り（平成 28 年 9 月 23 日撮影）

コンクリートの犬走りで覆ってある。側柱を固めるのは、内法貫と切目貫である。

拝殿は吹き放しで正面・側面に切目縁が回る。正面中央に若葉の虹梁がかかる。天井は敷目板張り天井である。

本殿拝殿の境の壁と腰付両面格子戸(図14)は痕跡から後補のものであることがわかるが、ヒアリングによれば、昭和3年(1928)の改修とのことである。

内陣丸柱の組物は出三斗で、虹梁と木鼻は渦文に若葉が一体的につく彫刻である(図15)。彫刻の形式としては18世紀後半に相当する。天井は棹縁天井である。

内陣に祀られる木造男神坐像は、八代市立博物館学芸員の石原浩氏によると、明治期以降の作と推定されるようである。慶応4年(1868)から明治元年(1868)にかけ通達された一連の神仏分離令の結果、仏教的である妙見信仰の要素が分離され、男神が祀られ、作像されたと考えられる。



図16 薬師堂(平成28年9月23日撮影)

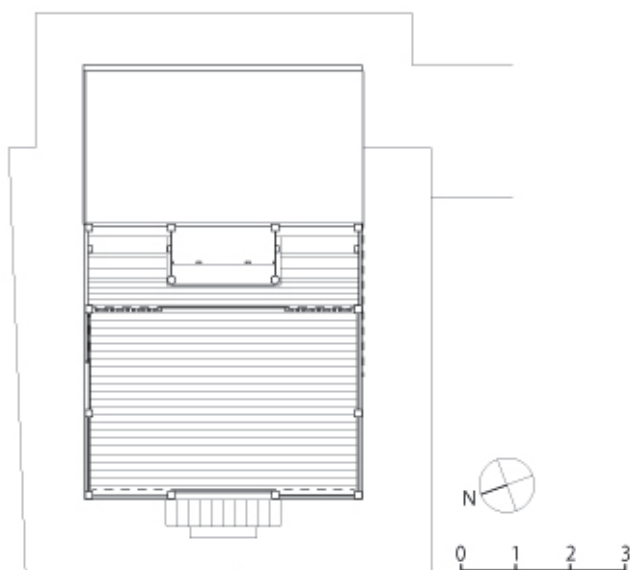


図17 薬師堂の実測平面図

4.2.2 柱間寸法

柱間寸法の算出にあたり1尺を303mmで計算する。

梁間の柱間寸法を拝殿正面で見てみると、中央が芯々1394.2mm(4.60尺)、内法1265mm(4.17尺)で、両側が平均して芯々約818.7mm(2.70尺)、内法約689mm(2.27尺)であった。合計の芯々は約10尺となる。

桁行の柱間寸法は、拝殿が平均して芯々約1227mm(4.05尺)、内法約1097mm(3.62尺)であった。本殿が芯々2021.5mm(6.67尺)、内法1890mm(6.24尺)であった。合計の芯々は約15.1尺となる。

このことから芯々制(柱割り制)によって計画されたと推察できる。

また側柱の柱径は最小128mm、最大134mm、内陣丸柱は直径194mmであった。

4.3 薬師堂

4.3.1 概況

薬師堂(図16、17)は北片宮とほぼ平行に建つ。後方に倉庫が増築されているが、それを除き桁行3間、梁間3間で、桁行のうち外陣は2間、内陣は1間である。

屋根は北片宮と同じ形式の入母屋造妻入り、棧瓦葺きである。大棟鬼瓦、隅鬼、巴瓦には卍がある。現在の瓦は、棟札(図18)より平成23年(2011)の葺き替えて、北片宮と同時に行われている。それ以前の瓦がやはり床下に保管されていて、そちらにも卍がある。写真から、妻飾りはこの葺き替え前後で変更なく狐格子である(図12)。

前述のとおり、棟札(図19)から昭和3年(1928)に小屋組改修工事が行われていることが分かり、この時、茅葺きを瓦葺きに葺き替えたと考えられる。

柱は石土台に立つ。この石土台の外周にコンクリートの犬走りが作られている。北片宮とは異なり、石土台自体は



図18 薬師堂棟札(平成23年4月)

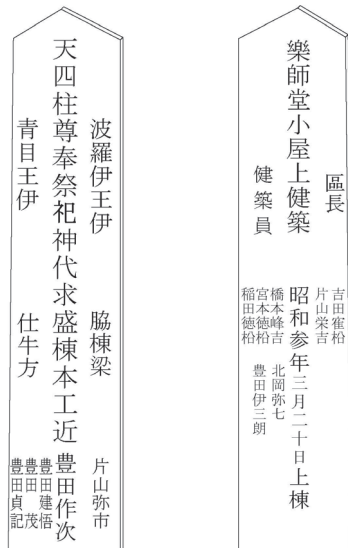


図 19 薬師堂棟札（昭和 3 年（1928）3 月）の実測図



図 20 薬師堂の内陣外陣境（平成 28 年 9 月 23 日撮影）



図 21 薬師堂の内陣（平成 29 年 1 月 18 日撮影）

覆れず露見している。

全面が板壁で、切目長押、内法長押がつく。正面中央には腰付両面格子戸が立てられ、上部に唐草の梁がかかる。正面両側の柱間の小壁に豎格子が嵌められている。

内部の床は板敷き、天井は外陣が敷目板張り天井、内陣が竿縁天井である。内部も内法長押が回る。内陣外陣境に 48 mm 角の堅子をアキ 48 mm で並べる小間返し格子を全面



図 22 薬師堂の仏壇の上部（平成 28 年 9 月 23 日撮影）



図 23 薬師堂の仏壇前柱
 （平成 29 年 1 月 18 日撮影）

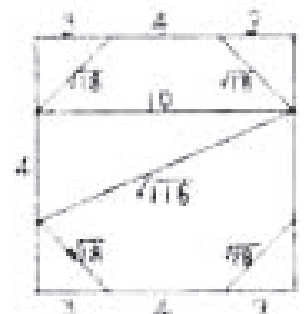


図 24 はやづくり
 （出典：文献 21）

に立て、中央のみ同じ格子の引分け戸とする（図 20）。

内陣（図 21）の仏壇前柱は粽がつく丸柱で、組物は出三斗である。虹梁、木鼻には雲文彫刻が施されている。これら前柱、組物、虹梁、木鼻は極彩色で装飾されている（図 22、23）。

本尊は本来薬師如来立像であったとされるが、50 年ほど前に盗難に遭い、新たに薬師如来坐像を作り替えている。脇侍に正面から右に日光菩薩、左に月光菩薩を安置する。いずれも八代市立博物館学芸員の石原浩氏によれば、昭和の作である。また脇仏壇には 9 体の十二神将が祀られている。これらは一体は昭和の作、残りが造形、色彩から江戸時代の作と推定されるようである。

神仏分離令の際、確かに妙見信仰の要素が分離され北片宮に変更されたものの、同一境内にあった薬師堂は残された。これは小社小堂であることに加え、薬師堂がそもそも村民により再興され、地域住民によって篤く信仰されており、廃仏毀釈の気運が高まらなかったことが挙げられる。

4.3.2 柱間寸法

梁間の柱間寸法を拝殿正面で見てみると、中央が芯々 1907.5 mm (6.30 尺)、内法 1775 mm (5.86 尺) で、両側が平均して芯々 約 1508.8 mm (4.98 尺)、内法約 1376.5 mm



図 25 二棟が並ぶ景観（平成 28 年 9 月 23 日撮影）

（4.54 尺）であった。全体では芯々 4925 mm（16.25 尺）であった。

桁行の柱間寸法は、正面側の柱間が芯々 1499 mm（4.95 尺）、内法 1365 mm（4.50 尺）、中央の柱間が芯々 1912 mm（6.31 尺）、内法 1777 mm（5.86 尺）、奥側の柱間（内陣）が芯々 1504 mm（4.96 尺）、内法 1368 mm（4.51 尺）であった。全体では芯々 4915 mm（16.22 尺）であった。

中央の柱間は、梁間と桁行ともに芯々約 6.3 尺、両側の柱間は、梁間と桁行（正面側と奥側）ともに芯々約 5 尺であり、両辺の比例寸法を同じにする正方形平面として、芯々制（柱割り制）によって計画されたと推察できる。

この特徴的な木割について、文献 21 をもとに分析を行う。薬師堂の梁間、桁行の芯々の平均値 4920 mm（16.24 尺）を「はやづくりの法」（図 24）に従い、端の間：中の間：端の間 = 3：4：3 の比例により分割すると、1476 mm（4.87 尺）：1968 mm（6.50 尺）：1476 mm（4.87 尺）となる。合致しないものの、「はやづくりの法」による木割に近似するように、柱が配置されていることが分かる。

また側柱の柱径は最小 130 mm、最大 137 mm、仏壇丸柱は直径 147 mm であった。

5. 結論

実測平面図、配置図を作成し、建築的特徴と来歴を明らかにした。特徴的な点を以下にあげる。

- ・北片宮は成願寺（永正 10 年（1513））鎮守の片野川妙見社に由来し、神仏分離時に妙見信仰の要素が分離されている。ただし昭和、平成の屋根葺き替えでは八代神社（旧妙見宮）社紋を用いている。
- ・薬師堂は村人により成願寺を再興した（元禄 7 年（1694））もので、神仏分離時に残存した理由として、小社小堂であり、地域に廃仏毀釈の気運も高まらなかったためと考えられる。
- ・社堂が並び立つ特徴的な景観（図 25）は、水無川と濠に

囲まれた狭小な敷地の必然性と薬師如来の宗教的性格によって生じ、神仏分離を免れたことで現在に継承されたとと言える。

- ・建設年は、薬師堂が棟札から文政 3 年（1820）、北方宮は不明であるが内陣彫刻の形式は 18 世紀後半に相当する。
- ・どちらも芯々制（柱割り制）によって計画されている。特に薬師堂は「はやづくりの法」に近似する値を示している。

（平成 30 年 9 月 25 日受付）

（平成 30 年 12 月 5 日受理）

参考文献

- (1) 早野彰人：奈良木神社の建築的特徴と神仏分離に関する考察，平成 26 年度熊本高等専門学校卒業研究，（2015）.
- (2) 早野彰人・森山学：神仏習合を残す奈良木神社の建築的特徴と八代の神仏分離に関する考察，熊本高専紀要，第 7 号，pp.57-64（2015）.
- (3) 森山学・早野彰人：熊本県八代市にある奈良木神社と観音堂の新しい解釈，日本建築学会研究報告 九州支部，第 55 号，pp.585-588（2016）.
- (4) 森山学：奈良木神社・観音堂をあるく，くまがわ春秋，第 7 号，pp.32-35（2016）.
- (5) 早野彰人：新牟田加藤神社・阿弥陀堂の建築的特徴と神仏分離に関する考察，平成 27 年度熊本高等専門学校専攻科特別研究 I，（2016）.
- (6) 早野彰人・森山学：新牟田加藤神社・島阿弥陀堂・島観音堂の建築的特徴に関する考察，熊本高専紀要，第 8 号，pp.26-33（2016）.
- (7) 早野彰人・森山学：八代にある並立する社堂に関する一考察 新牟田加藤神社・島阿弥陀堂・島観音堂を事例にして，日本建築学会研究報告 九州支部，第 56 号，pp.525-528（2017）.
- (8) 森山学：島阿弥陀堂、島観音堂、新牟田加藤神社をあるく，くまがわ春秋，第 11 号，pp.42-46（2017）.
- (9) 八代市編纂協議会：八代市史，第 3 巻，八代市教育委員会，pp.233-305，pp.514-516（1972）.
- (10) 鏡町干拓史編纂委員会：鏡地方における干拓のあゆみ，鏡町教育委員会，pp.44-45（2003）.
- (11) 後藤晃山編：肥後國誌，下巻，新潮社，p.347（1916）.
- (12) 松本雅明著作集編纂委員会：肥後の国府と古代寺院址の研究—松本雅明著作集（3）, 株式会社弘生書林，p. 293（1987）.
- (13) 角川日本地名大辞典編纂委員会：角川日本地名大辞典 43 熊本県 総説・地名編，角川学芸出版，p.625（2009）.
- (14) 八代市編纂協議会：八代市史，第 4 巻，八代市教育委員会，pp.285-294，pp.491-495（1974）.
- (15) 八代市編纂協議会：八代市史，第 5 巻，八代市教育委員会，pp.638-646（1978）.
- (16) 田代政嗣：新訳求麻外史，求麻外史発行所，p.82，p.162（1917）.
- (17) 八代市教育委員会：八代妙見祭，八代市教育委員会，p.91，pp.302-306（2010）.
- (18) 石川愛郷：八代郡誌，株式会社臨海書店，p.407，p.444（1927）.
- (19) 土肥賢一郎：球磨郡神社記，球磨叢書刊行會，pp.6-20（1972）.
- (20) 村上豊喜：肥後国南部における地域社と領主権力，熊本史学，No.64-65，pp. 62-75（1988）.
- (21) 石井邦信：法隆寺夢殿と栄山寺八角堂の平面による相互関係について（方五斜七による検討），日本建築学会九州支部研究報告書，第 18 号，pp. 109-112（1970）.